

筆と心

木村 鍊 戒

秋の一日、私は机に向つて、金色に輝くペン先を通じて思索のまゝを、白い紙上に走らせてゐた、想ひはそれからそれへと推し進められて行つた。書き記したい事は頭にみち溢れてゐた。幸にペンと手は従順に大脳の命に服し忠實に活動した。

ふとペンを休めて、今迄たどつた思索の跡を回想し乍ら、机上のインクを以てうね／＼とわが思想を染めた紙を靜かに黙視してゐると、何とも名狀し難い神秘不可思議の感に撃たれた。如何にして我等の形なく影なき思索が、斯くは判然と、青き液体を細長い棒の端に取り付けたペンと云ふ金屬性のものを先に附着けて、白紙に滲み込ませられたものに於て象徴し得られるのか。

常識的見解によれば、紙やペンやインクは單なる物質ではないか。而して思索は純然たる精神の一作用ではないか。この物質を借りて表現された私共の意識内容を、更らに視覺に仍てうけとられて理

解思考されるのが如何にも不可思議に想はれる。かくて今我眼前に横はる一個のペンも、我等に取つては誠に不可思議な存在であつて、彼（ペン）我（思索）の間の本質的關係を考へずに居られない。實に此の「驚き」は哲學的思索の萌芽ではないだらうか。止むにやまれぬ形而上學的な欲求に基く思索は斯る驚きより出發するのではなからうか。

斯くてこの「驚き」を追窮してゆく時、ペンとは何かインクとは何か紙とは何か、それを支へて字を書くところの手と肉体と机とは一体何であるか。またこれ等をして字を書かしめる人間の精神とはそも／＼何であるか。然しこれ等微妙不可思議なる現象は其の相様々であるが、試みに是等を炎々たる火中に投じて見よ。そこに残るものは何か、たゞ一抹の灰のみではないか。人間精神と雖も然り、老少不定賢愚無別、如何に偉大なる賢聖と雖も一度死に遭へば、永劫に彼等は再び生れて其の容貌其の肉体其の心を以つて、其の思索を縦にするに由もない。

斯くの如くこの現象界は凡て千變万化極りがない。我等は永劫に不變不動なる本体とも云ふべきものを求むることは出来ないであらうか。

かくて一本のペンを持つて字を書くといふ、些細なる事實を反省し思惟する時、それはやがて宇宙存在の原理に就いて語り、又人生そのもの、秘義を説かざるを得ない。

古來人類思索の歴史に就いて、世界人生の謎を説かんとするに方り、世界の本質は「物」なりや「心」なりや、或は「物」と「心」との相關して成立つものなりや等の疑問を掲げ、その思索的解決に痛ましき努力をつくしてやまなかつた。偉大なる賢哲を思ふとき、如何に人間の形而上學的欲求、實在認識の熱烈なるかに想到せざるを得ないのである。

今たま／＼「ペンを取りて文字を書く」といふ事實の神秘に驚きし我は、古來の哲學的思索を吾がものと想定して、「ペンを取る」事實を例にし、以て形而上學的思索を試みやう。今唯物論的にこの事實を考へるとき、唯物論は世界を全く唯一つの「物」をもつて實在の究極の本体（原因）となし、すべてを物的に説明しやうとするものである。是の宇宙に存在してゐる凡ては、物質的なものばかりで、精神などと云ふものは存在してゐるのでなく、精神と云ふもそれは物質のある意味の働き、又は物的活動の一現象に過ぎないのであると云ふのである。こゝにペンを持つて文章を書く場合、すべては物質のはたらきであつて、我等の微妙なる精神作用と雖も單に大腦といふ物質活動の所産なりと考へられ、ロバートマイヤーの如きは「精神とは要するに腦髓の小便なり」とまで極言してゐる程である。されば唯物論者に従ふときは、物質を離れたる獨立なる精神生活などは全然承認しないのである。

然るにこれと反對に唯心論は、世界の本質は心であつて物ではない。ペンがあり紙があつて我等が

これに文章を綴るのは、吾等に心があつてペンや紙の存在を認識し心ありて物を考へるからである。といふのであるから主觀的觀念論的な唯心論は、認識論と離れることの出来ない關係のあるものであつて、ペンや紙やインクは一つの觀念的存在即ち精神現象なのである。故に本統に存在してゐるものは精神ばかりであつて、物質とは精神現象の一つの形式に過ぎないのであると云ふのである。

此唯心論と唯物論とは共に一元論的に説く点は、軌を一にしてゐるが、かく全然お互の説くところが一方に偏し相反してゐるので、これを解する上にも極めて無理と獨斷と難解とに陥らざるを得ない。勿論哲學的欲求は、いつも一元論の方へ向つて行くのであるから、二元的に立てることも形而上的的要求として満足されぬであらう。そこで物質も精神もたゞその表はれる形式の上で異つて來てゐるのであつて、物質と精神とは互に並んで行く關係があるのだと云ふのがスピノーザの所謂物心並行論である。而して私共はこれを經驗的並行論に簡むで形而上學的並行論と名付ける。

この説に従へば、物質は獨立の存在にして精神と共に宇宙の二元素である。されば今ペンを持つて思考を紙に連ねることは、精神活動と物質活動の兩者によつて成立するのである。即ち物心兩者に高下傍正を別たさずして、何處までも同價值と觀、同等の存在權利を持たせるのである。而して形而上學的並行論は、物心二元の統一的立場を神に押付けたがこれは明かに獨斷である。

更に經驗的並行論に従へば「經驗」は眞に形而上學の據つて立つ根柢である。そして實在の眞相はこの經驗に依つてのみ説明しつくさるのである。經驗こそ唯一の實在の成立根據である、これ所謂直接經驗と稱し純粹經驗と言はるところのものである。

直接經驗の事實に於ては、未だ主もなく客もなき主客未分の境地であつて、何等思惟の混じない事實のまゝの現在意識である。實在は此の場所に於てのみその眞の姿を顯はす。

唯物論者は物のみが唯一の實在であつて、万物は皆物力の法則に従ふと云ふが、然し實在の眞相は果して斯くの如きものであらうか。物体といふも意識現象を離れて別に獨力の實在を知り得るのではない。物も心も皆この事實を説明する爲に設けられたる概念にすぎない。元來精神(心)と自然(物)との二種の實在があるのではなく、此の二者の區別は同一實在の見方の相違より起るのである。純粹經驗に於ては物心主客の區別對立はなく、物心は實在ではない。體驗的事實としての實在の見方に於ける抽象的概念であるに過ぎない。

經驗的並行論とは、先に述べた形而上學的並行論の如き物心の並行を云ふにあらずして、直接經驗の中で意志的方面と表象的方面との並行を指すのである。

例へば、是にペンを持つて文章を書いてゐる、この「書く」といふ事實は知識でも意志でもなく、

唯一つの体験的事實であつて、直観体験の發展は思惟である。思惟は形式化即ち概念化作用である。前のペンで書くといふ体験的事實が對象化せられた時、既にそれは反省されたる表象亦は概念といふ抽象的知識的なもので、もはや實在ではなくなる。然しこの場合の知識するといふ作用そのものは、依然純粹經驗である。この知識作用と「書く」といふ體驗とは表裏をなしてゐる。かゝる體驗は意志作用とみることも能ざるからこれを並行關係と云ひ、かゝる考へを經驗的並行論と云ふのである。

現實に於ける意識体系の發展する状態を、意志作用は所謂直接經驗である。この場合反省作用が起り、この發展状態を反省する知識作用は所謂間接經驗である。ペンを持つて字を「書く」意志作用とペンを走らせてゐる事實を反省する知識作用は、一つの並行的なものが見ることが能きる。かくて私共は唯物論唯心論形而上學的並行論といふ如き、古き思辯的な形而上學的立場を抜け出て、新しき認識論的試練を経て、深き經驗的立場に基いて形而上的世界を觀ることが能きる。

斯く觀來るとき、唯一本のペンと心とのかかりあひに於て、深い哲學を味識することが出来る。ペンを擱いて、靜かにその金色に光る姿に視入つてゐると、何となく一種言はれぬ神秘不可思議の感に撃たれる。